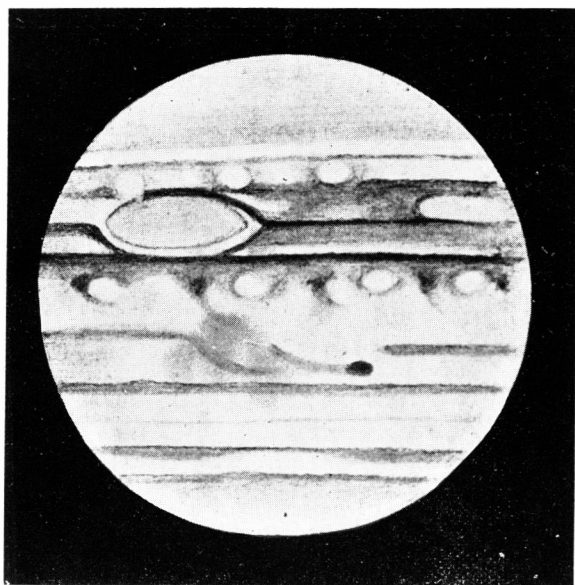


木星を迎えて

今年の御正月ほゞ賑やかな御正月は無い、例年の美しい眺めを誇る冬の星座たちの居ならぶまん中へ、天界の王者「木星」がやつて來たんだから、此の頃の、日が暮れて直ぐの天空の絶景は、とても、さうも口に表はされない。

今んきの木星は、去る十月四日に停留、十二月四日に對衝、それから本年



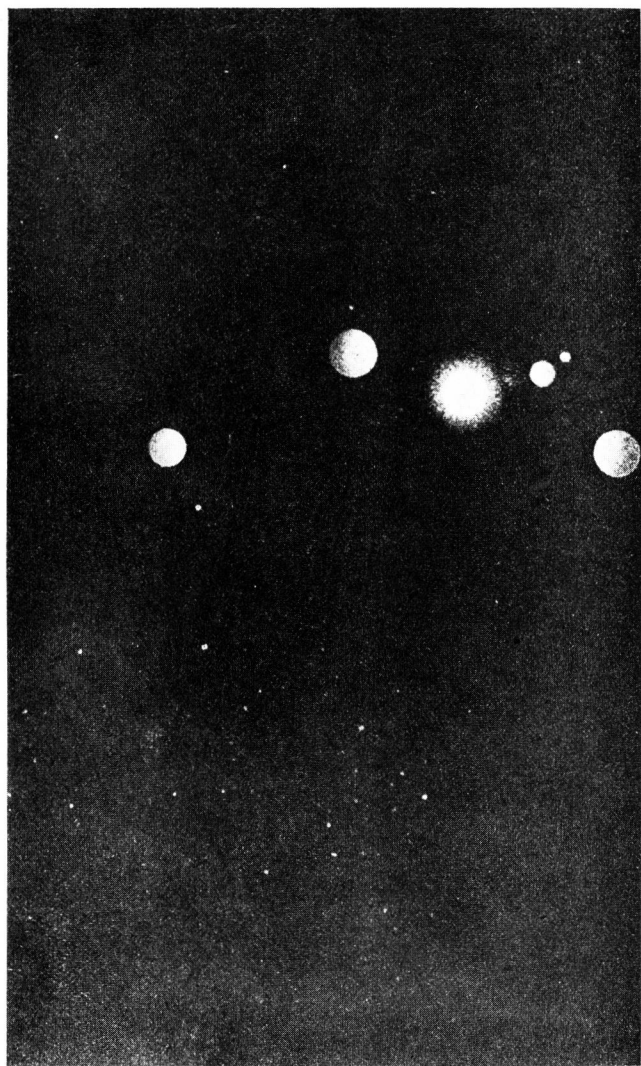
木星の世界（デニング氏）

一月三十一日に停留さなるのであるから、今は既に最近距離の時機を過ぎ去つたうらみはあるけれど、しかし、やはり、視直径は $40''$ を越えてゐるから、50 倍の望遠鏡で眺めるこゝ、満月よりも大きく見える筈である。光りはマイナス2.等3 さいふの

が年頭の光輝であるから、恒星界の王者シリウス星よりも二倍ほゞ強い。

四五年前までは、『全世界の天文研究上の中心が皆恒星の方へ向いて了ひ、太陽系の（殊に、遊星たちの）研究なきは、全く忘れられた形で』あつたが、最近年には、又々、あちらこちらの天文臺で、金星、月、水星、木星、火星、土星なきの新研究が甦生して來た傾向がある。我が木星についても、永く、『木星は焦熱世界だ』なきさいふ言葉が教科書的に信じられてゐたのに、近年、米國のキルソン山天文臺のペット氏等が、熱電流計を大反射鏡に取りつけて、木星世界の温度を測つた結果、豈圖らんや、此の世

界の表面は攝氏の零下140度といふ驚くべき寒冷な世界であることが知れて來て、人々を嘖然させた。リク天文臺のライト氏等の色寫眞の結果もあり、又、メンゼル氏の木星スペクトルの研究もあり、英國のアマチュア天



木星世界から太陽系の中央方面を顧る!?

(何か少しく變なことは無いか?)

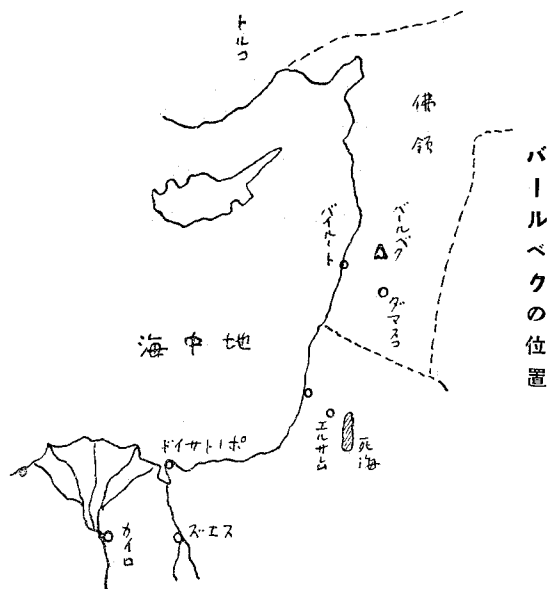
文家ハーグリーヴス、ピーク、フィリップ諸氏の眼視観測もあつて、木星學界は中々の賑はひである。

木星は昔の支那で「歳星」と呼んで、年々の十二支を示す曆學上の重要な星であつたが、西洋でも、此の木星はいろいろな意味に用ゐられたものである。

昔しのバビロニアでは、木星を「マールドゥーク」(Marduk) と呼んだ。「マールドゥーク」は、神々の王として、バビロン帝國を護り、千軍萬馬を統率して敵を壓する軍神である。この軍神「マールドゥーク」が、ギリシャの文化に採り入れられて「ジウス」(Zeus) 大神となり、又、それが羅馬の神話に結び付けられて、「ジュピター」(Jupiter) となつたものである。

故に マールドゥーク = ジウス = ジュピター = 木星
 Marduk Zeus Jupiter

こいふ關係なる。



最近、西部アジアのフランス國委任統治領中のバールベク Baalbeck 古都から發掘された古代のバビロニア文化の遺蹟の中に、マールドゥーク神殿の跡が明らかに現はれてゐるので、こゝに寫眞で紹介することにした。



シリアのパルメクより掘りされたジュピター神殿の
巨大な圓柱の列



バールベクにあるジュピター神殿の廢墟
(古代の地震にて破壊されたるもの)



パールベクのジュピター神殿正面の台の一部

單に「物好き」からで無く、嚴肅な宗教心によつて木星を神化し、之れを崇拜した古代人の心理は、其れが餘りに現代離れてゐるため、一寸想像出來にくいほゞであるが、『星は現代的學者の專有物に非ず、一般民衆のさまざまな心にうつる星の印象も、必ずそれに何等かの或る文化的意味があるものである』といふ見地から見ると、古代人の心は、まはりくさくないだけ、それだけ、現代の吾々の心以上の廣さゝ深さゝを見せてゐる言へやう。